

特別寄稿 (1)

広島の地で部落解放と人権政策の確立をめざして闘う皆様へ
固い連帯のご挨拶を申し上げます

コルディレラ人民同盟 事務局長 デクデケン・サラ・キロンガン

部落解放・人権政策の確立を求める広島県民集会実行委員会と集会へ参加された皆さま、

本日、部落解放・人権政策の確立をめざして闘う広島県民集会実行委員会主催の記念すべき51回大会にお招きいただいたことを光栄に思います。フィリピンで闘うコルディレラ人民同盟を代表して、皆さまに心より連帯のご挨拶を申し上げます。パンデミック蔓延の影響のために過去2年延期されて、待ちに待ったこの日を迎えられたことを心よりうれしく思っております。

私たちは、フィリピンのルソン島北部に住む先住民族です。世界で、先住民族とは、帝国主義が先住民族の土地に侵略する前から、先住民族の土地が植民化される前から今日まで、政治・社会・文化・生活の歴史的な伝統を持ち続ける人々とされています。私たちは、フィリピンにおいて多数者が形成する一般社会とは異なる社会と文化を形成し、持ち続けてきました。私たちは、長い間、植民地的な支配を受けてきましたが、私たちの社会や文化、経済、そして政治システムを祖先から受け継いで、守り抜いてきました。フィリピンにおいて、私たちの言語や文化、信仰、生活様式は、多数者のフィリピン人のものとは異なります。私たちは、多くの国の先住民族がそうであるように、また日本のアイヌがそうであるように、フィリピンの先住民族・マイノリティの地位にあります。

17世紀から19世紀にかけて、スペインは、フィリピンの土地の大部分を軍事的・政治的・文化的に支配し、植民地にしました。しかし、ルソン島北部のコルディレラ地方の人々や南部のミンダナオや群島のモロ族やルマード族は、スペインの支配に抵抗しました。その結果、スペインに完全に征服され、土地の大部分が植民化されることはありませんでした。しかし300年に及ぶスペインの支配により、フィリピンにおいて、植民化されたフィリピン人、つまり多数派フィリピン人と、植民化されなかったフィリピン人、つ

まり少数派フィリピン人の分割が生じました。フィリピンの先住民族マイノリティは、こうして生まれました。多数派と少数派は、フィリピン人として多くの共通点をもっていますが、多数派は、それ以来、スペインの支配に組み込まれて、少数派を二級国民として扱ってきました。少数派は、スペインの支配にあっても先祖代々の土地と社会組織、文化を守り続けた誇りある「二級」国民です。まさしく私たちがそうなのです。

20世紀に入って、スペインに代わってアメリカがフィリピン植民地の宗主国になりました。アメリカは、スペインがなしえなかった先住民族の支配を効果的に行いました。その中でコルディレラの土地と人間も、植民地化されてしまいました。しかしそれでもなお、アメリカの支配の最初から、フィリピンが独立して今日にいたるまで、コルディレラの私たちは、アメリカの帝国主義的で、フィリピン政府の専制的で過酷な圧制に抵抗し、先祖代々の土地と自然資源、先住民族としての文化や生活、アイデンティティを守り、民族自決、つまり自らの運命を自ら決定する政治システムの形成を訴えてきました。

今日、フィリピンの人口は1億1千万人ですが、そのうち約1,500万人から1,700万人が先住民族を構成しています。コルディレラ地方では、イゴロット族として一括されるさまざまな先住民族が、人口の大半を占めています。私たち先住民族は、多くの植物・動物が棲息し、豊かな鉱物資源が埋蔵される土地に住んでいます。これらの土地と資源を守り、自然の恵みを享受することは、先祖伝来の私たちの生活の大部分をなしてきました。なぜなら、先住民族にとって、土地は命だからです。私たちの文化とアイデンティティは、私たちが占有する土地や自然と本質的に結びついています。私たちは、その土地や自然と一体なのです。それがなければ、私たちはアイデンティティを失い、先住民族として、同時に人間として生存できなくなります。土地と自然は、どのように過酷な支配を受けようとも、ぜったいに譲ることのできない私たちの命そのものなのです。

他方で私たちは、「異質な他者」として、フィリピンの国家からさまざまな抑圧を受けて苦しんできました。私たちも、世界の先住民族がそうであるように、外国の植民地主義と自国の専制支配という、先住民族の二重の抑圧と苦難の中で生きてきました。フィリピンの国家と政治も、要するに、一部の支配エリートが自分たちの利益のために国民を支配するシステムにほかな

りません。そしてその支配エリートの利益は、結局は、外部の支配者に吸い上げられていきます。この点では、私たちは、フィリピン国民の全体が直面する課題を共有しています。つまり、アメリカ帝国主義と封建主義、官僚的資本主義による抑圧と苦難、それらに対する闘いという共通課題です。

私たちコルディレラの先住民族と他地域の先住民族は、アメリカ帝国主義とフィリピン政府により苦難を強いられてきましたが、今日まで続いている問題には、次のようなものがあります。

- 1) 先祖代々の土地に対する先住民族の優先的占有権を侵害すること。侵害は、強引に土地を接収する、土地接収を可能にする法律をつくる、鉱山を採掘する権利を与えるなどの形で行われています。
- 2) エスノサイド、つまり文化破壊から住民虐殺に及ぶ地域の軍事化、つまり軍事支配をすること。
- 3) 先住民族を蔑視し、不当に扱って、社会・政治から排除すること。これは、フィリピン政府だけではなく、多数派フィリピン人にも責任があります。
- 4) 先住民族の文化と生活を商業化し、その質を貶めること。資本主義は、私たちのアイデンティティを剥脱し、私たちが利己的にし、私たちの間に分断をつくり出しています。
- 5) 民主的な法律をアリバイ的につくるだけで、私たちに基本的社会サービスを提供しようとする政府の怠慢。
- 6) 政治・法・社会の中で制度化された差別。私たちは、個人による差別だけではなく、社会のしくみとして体系的に、そのような扱いが当然であるかのように差別されています。

私たち先住民族は、国家による抑圧という長きにわたる問題に対して、民族自決権の要求をもって問題の解決をめざしてきました。民族自決権とは、先住民族の政治的決定を先住民族自身が、何ものにも阻害されずに行い、先住民族の未来をみずから決定する権利のことをいいます。私たちでいえば、コルディレラにおける民族自決とは、フィリピン国民としての権利を多数者フィリピン人と共有しつつ、コルディレラにおける正当な自決権を行使し、地域が本当の自立を達成することをいいます。それは、本当の意味で国民が主権者であること、その国民が自らの運命を決めるといふ、真の民主主義の政治とその体制の一環をなすものです。

1970年代から1980年代にかけての戒厳令時代、独裁者フェルディナンド・マルコスは、世界銀行の資金援助を受けて、チコ川沿いに4つの巨大ダムを建設しようとしていました。同時に、20万ヘクタールの森林をマルコスの取り巻きの伐採会社に譲渡しました。先住民族は、生命と先祖代々の土地と生活、誇りある文化を守るために、法的手段に訴え、また武装闘争をも辞さず、これらのプロジェクトを阻止する果敢な闘いを行い、敵をとことん追い詰めて、ついに計画の撤回を勝ち取りました。この画期的な闘いの勝利は、コルディレラにおける大衆運動の発展への道を開きました。1984年6月に27の人民組織により、「先祖代々の土地を守り、民族自決を求めるコルディレラ人民同盟」の創立へと至りました。コルディレラ人民同盟の目的は、先祖代々の土地と自決権を守り、専制と独裁の国家から自由と民主主義を守るために闘うことでした。その後、コルディレラ人民同盟の闘いは前進して、パンデミックが蔓延する前の2017年のコルディレラの全地域大会の時点で、人民同盟の会員は、306の先住民族団体、女性、若者や学生、労働者、農民、長老、文化労働者やアーティスト、人権活動家などを部門別に組織するところまで増えました。

今日までに、コルディレラ地方1,600万ヘクタールの60パーセント、つまり、1,200万ヘクタールが、国内外の鉱山会社による土地接収と鉱山開発のターゲットとされてきました。この中にはコルディレラ調査会社も含まれています。この会社は、日本の住友が株式の40パーセントを所有する金属鉱山会社のパートナーであるニッケル・アジア会社の子会社です。この会社は、政府から調査許可をもらって、コルディレラの4つの地域の76,000ヘクタールに及ぶ土地の鉱物資源を調査して、それを採掘する許可を政府に申請しています。2021年12月に、この会社は、コルディレラのベンゲット地方の先住民族コミュニティで、「自発的な意志に基づく（つまり自由契約という建て前の）、事前の、十分な情報に基づく同意FPIC」を取得しようとしてきました。取得の対象は、11,000ヘクタールに及ぶ広大な土地でした。しかしその目的は、先住民族コミュニティによって拒絶されました。本来なら、この会社は、当該コミュニティの住民が同意しないという決定を尊重して、即座に立ち去るべきところです。しかしこの会社は、現在も政府機関である先住民族国家委員会と結託して、住民の否決を撤回するように当該コミュニティの住民を説得する協議を行うように動き回っています。

このような大規模な鉱山開発以外にも、私たちは、政府のエネルギー省が発注した 93 にも及ぶ水力発電や地熱発電のプロジェクトの攻撃を受けています。私たちは、これらの、自然と私たちの生活を破壊しかねないプロジェクトに抵抗しています。しかし、そのような私たちの土地と権利を守るための闘いは、政府によってテロ行為であると烙印され、犯罪だとされてきました。

前任のドゥテルテ専制政権は、パンデミックの蔓延を利用して、コミュニティのロックダウンを行い、人々をコミュニティに閉じ込め、人間の移動を禁じて、コルディレラの大衆運動を封じ込めました。また、コルディレラ人民同盟の多くの指導者と構成員が、軍と警察による意図的にかつ公然とテロリスト呼ばわりされ、捏造した罪状にさらされてきました。最近では、2018 年のこの広島集会で講演したので、皆さん覚えておられると思いますが、コルディレラ人民同盟議長のウィンデル・ポリングゲットさん、そして私が、軍と警察の卑劣な策動の被害にあっています。ウィンデルさんは、完全な冤罪（行ったこともない土地で人を殺したという）の殺人事件で警察により起訴されました。2020 年 12 月から 2021 年 1 月の間に、軍と警察が合同してウィンデルさんを逮捕するため捜査が行われ、彼を発見次第 Shoot-To-Kill（銃殺）していいという命令が出されました。軍と警察の意図は、ウィンデルさんを殺害することであり、殺人事件の冤罪は、彼の殺害を正当化するものでしかないことは明らかでした。しかし、かれらの計画は成功しませんでした。ウィンデルさんの裁判は、2021 年 7 月に証拠不十分で却下されました。しかし、彼と家族に対する脅迫は、現在も続いています。また 2021 年 1 月に、私が、インターネットでコルディレラ解放闘争の英雄の記念碑を冒涇した警察を批判したとき、警察は私に対してサイバー名誉毀損事件を起こしました。この裁判は、現在も進行中です。これらは、先祖代々の土地とわが自決権を守るという当然の運動が、国家により犯罪行為とみなされ、テロリスト呼ばわりされるという数多くの事件のほんの一例にすぎません。

2021 年には、「テロ対策法」が制定されました。そこでのテロの定義は曖昧で、フィリピン全体で人権状況の強権的な悪化が危惧されています。テロ対策法によれば、警察に疑いをかけられただけで、だれもが簡単にテロリストに指定されてしまいます。先祖代々の土地や自然を守るための当然の運動をする活動家や民衆に対して、どんな形であれ、捏造された容疑や逮捕、恣

意的な拘留、射殺命令による超法規的（法を無視した）殺人、その他の人権侵害が行われる危険があります。先住民族は、非武装の民間人であるにもかかわらず、あたかも武装を隠した戦闘員であるかのように疑われて、簡単に軍と警察の標的にされてしまいます。フィリピンでは、テロ対策法によりまるでファシスト国家のような強権支配が、すでに行われており、公式に戒厳令を出す必要さえなくなっています。

先日、フィリピンの新大統領に選ばれたフェルディナンド・マルコス・ジュニアは、1972年から続いた独裁政権が、1986年にピープルズ・パワーの革命により倒れるまで、戒厳令を敷いて国民に君臨した独裁者・故フェルディナンド・マルコスの息子です。この大統領も、父親の独裁者となら変わるところはありません。彼は、先住民族の土地で、大規模な鉱山採掘や巨大ダムの建設などの新自由主義的な政策を、躊躇なく推進しています。また、必要とあらば専制政治も構わないとする政治信条の持ち主です。このように私たちは、ほとんどファシズムの暗黒時代に等しい状態に置かれています。

私たちは、自分たちの力だけで解放闘争に勝利することができないことをよく知っています。1984年にコルディレラ人民同盟が創立されて以来、私たちが達成したすべての勝利と利益は、地域レベル、国レベル、国際レベルのさまざまなグループ、組織、機関、人々の支援によって可能となったものです。

コルディレラ人民同盟の重要な闘いの一つは、国際連帯の活動にあります。世界の先住民族やマイノリティ、人権の擁護者との国際的な連帯と協力を構築し、強化することの重要性を訴えています。国際連帯の活動を通して、私たちが抱える問題や困難を国際社会に訴え、各国の政府や政府間機関に働きかけ、私たちの問題や要求に対してフィリピン政府が耳を傾け、行動するように圧力をかけるよう訴えています。それは、私たちの闘いだけではなく、世界の先住民族の闘いを前進させることにも貢献するものであると信じています。

同時に、コルディレラ人民同盟が創立される前から先住民族の闘いに支援をいただいた海外のグループとの間に強い絆を形成してきました。その中には、日本の被差別部落の人々も含まれています。コルディレラ人民同盟の長老の話によれば、私たちと被差別部落の人々との絆は、1980年代初頭に

までさかのぼります。コルディレラ人民同盟が創立された後は、被差別部落の人々の活動の中心は、都市の貧困層を支援する方へ移行したようです。とはいえ 40 年以上にわたって、私たちは、被差別部落の人々と連帯し、訪問やさまざまな形の支援を受け入れてきました。

2015 年には、青木秀男先生の紹介により、部落解放同盟広島県連合会の皆さんと出会うことができました。その後、私たちの重要な活動、とりわけコルディレラの全地域の集会（コルディレラ・デー）、マニラ首都圏におけるラクバヤン（少数民族の行進）やキャンプ活動、コルディレラ人民同盟の大会にいただいた解放同盟広島の委員長と国際連帯部長の連帯のメッセージ、相互の大会への参加や発言を通して、解放同盟広島の皆さんと、ともに闘うお仲間たちの闘いのことを知り、海を越えてともに抑圧と差別と闘う心強い仲間がいることを知り、元気をいただき、連帯の気持ちを強めてきました。

私たちが闘いの中にあるとき、たとえば 1998 年から 2002 年にかけてのサンロケダム建設に反対する闘いには、解放同盟広島の皆さんと、ともに闘うお仲間たちから激励のメッセージをいただき、さらに日本の市民から幅広い支援をいただきました。サンロケダムは、国際協力銀行（JBIC）が出資するフィリピン最大のダム計画であり、世界でも 16 番目に大きなダム計画でしたが、お陰様で 2007 年に、国際協力銀行は、最終的にダム計画への支援を打ち切りました。私たちは勝利しました。

そして現在、住友商事のコルディレラ金属鉱山株式会社は、私たちの土地の大部分を大規模な採掘のために侵害しようとしています。私たちは、ふたたび日本人々に、同社が採掘申請を撤回するように圧力をかけていただく支援を訴えています。

本日、コルディレラ人民同盟を代表して、この暗くて厳しい時代に私たちと同じ思いを持ち、同じ闘いを組んでこられた解放同盟広島の皆さんと、ともに闘うお仲間たちに心から敬意と感謝の意を表したいと思います。ともに抑圧、拘束、搾取、差別と闘い、人間の尊厳をもって自己決定ができる民主社会の実現に向けて、前進しようではありませんか。

有難うございました。

永遠の国際連帯に、万歳！

Long live International Solidarity!

(2022年10月2日 福山市立人権交流センター)